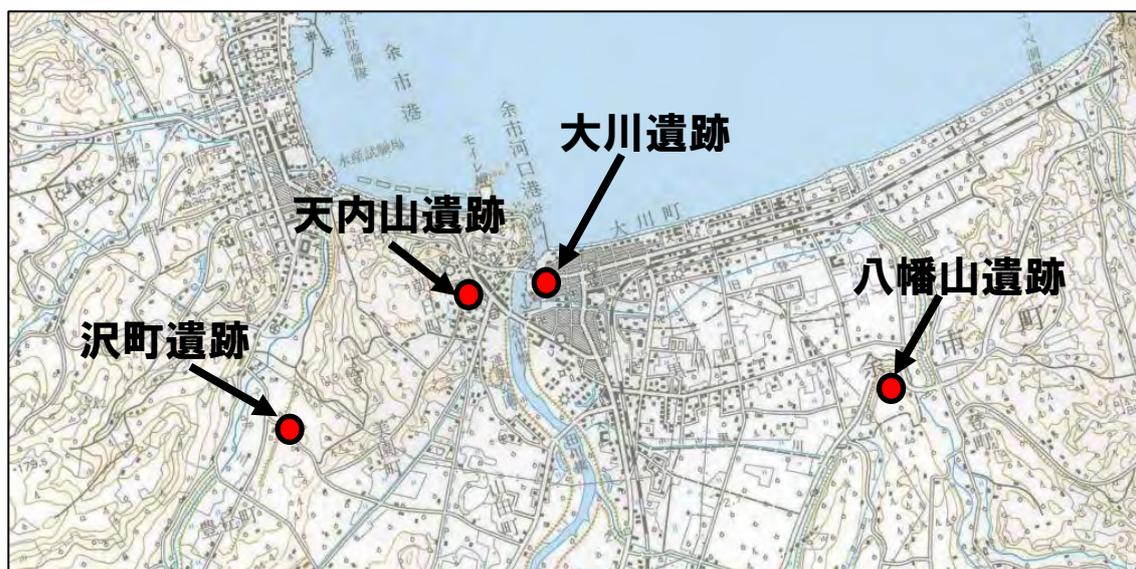


余市町内の遺跡からみる擦文時代の墓

よいち水産博物館 学芸員 小川康和

八幡山遺跡の発掘調査では擦文時代の住居址 3 軒がみつかりましたが、擦文時代のお墓は確認されませんでした。本報では余市町内の他の遺跡での擦文時代の住居や墓の検出例を紹介し、八幡山遺跡と比較しながら当時の人々の暮らしの一端を見てみたいと思います。

これまで余市町内で発掘調査が行われた遺跡のなかで、擦文時代の遺構や遺物が確認されたのは、沢町遺跡、天内山遺跡、大川遺跡の 3 箇所があげられます。八幡山遺跡が登川の近くに位置するのと同様に、いずれも大きな河川の近くにあります。



各遺跡の位置関係

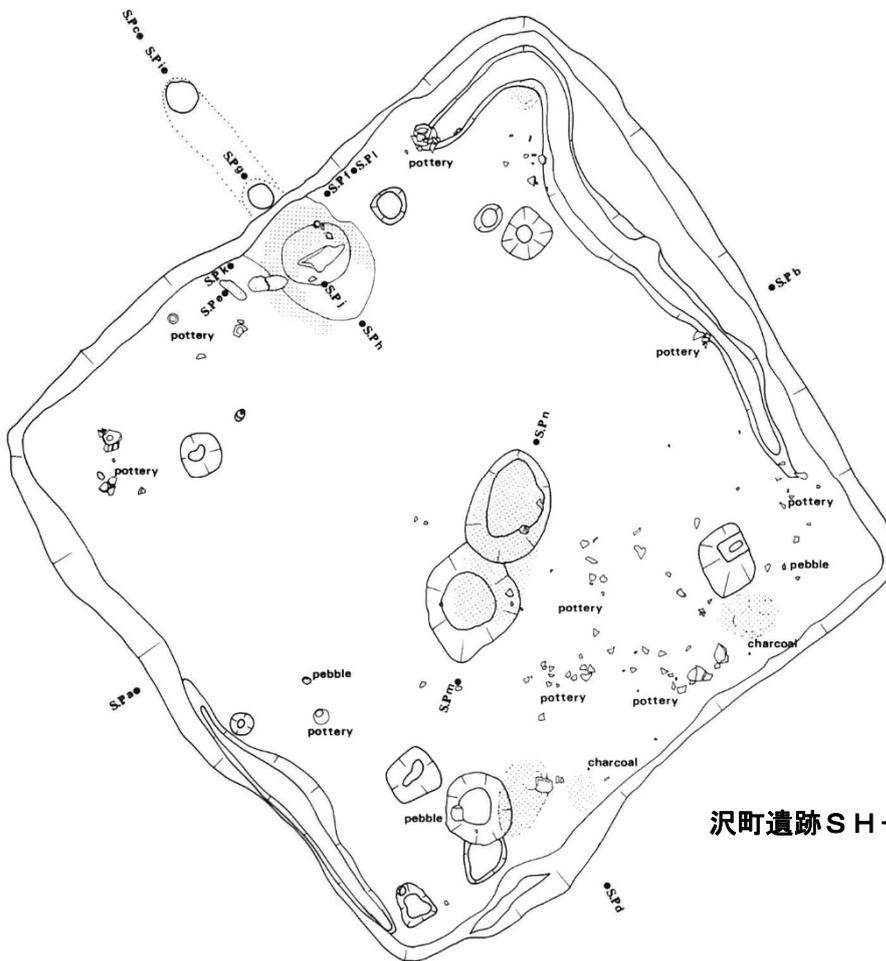
1) 沢町遺跡

町西側のヌッチ川近くの小高い丘の標高 30m ほどの緩斜面に位置する沢町遺跡では、擦文時代の住居址 4 軒がみつかりました。

平面形はみな隅丸方形（角の丸い正方形）をしており、カマドが無く住居の床のほぼ中央に火を焚いた炉の跡が確認された小型の 1 軒（SH-3、2.6×2.4m）を除く 3 軒は共通してカマドが西側に設けられており、カマドから住居の外に向かって煙を外に出すためのトンネル状の煙道（長さは 1.3m～2m）が作られています。3 軒の住居の大きさは 5.5m～6m ほどです。

そのうち 2 軒（SH-1、SH-2）のカマドの焚口周辺には平たい大型の礫が数点出土し、焚口を補強するための袖石として使用されたものと思われる。

しかし、沢町遺跡では縄文時代晩期のお墓は多数みつかったものの、八幡山遺跡と同様に擦文時代の遺構は住居址だけでお墓はみつかりませんでした。



沢町遺跡SH-2 検出状況

2) 天内山遺跡

町の中心部を南北に流れる余市川の河口周辺には、二つの擦文遺跡が位置しています。一つは出土遺物が北海道指定文化財となっている天内山遺跡です。その場所は現在、住宅地となっていますが当時の記録によると高さ 20m ほどの小高い丘があり、その上部に位置していました。住居址はみつきりませんでした。擦文時代に属すると思われる墓が 7 基みつきり、いずれも遺体は確認されませんでした。そのうちの 4 基には遺体が埋葬されていた周辺に 2~4 点の配石がみられます。このような配石を伴うお墓は道央部を中心に検出例があり、江別市ウサクマイ遺跡での発見例からウサクマイ葬法と呼ばれる擦文時代にみられる特徴的な埋葬方法です。

第 10 号墳墓は大きさ 1.6m×0.9m、深さ 40 cmを測る長楕円形をしており、遺体が埋葬されていたと思われる両脇には長さ 30 cmほどの礫（角礫）が 4 点配置されているのが特徴です。遺物としては礫に囲まれるように大刀、刀子、袋柄鉄斧、環状金属製品が各 1 点出土しています。他の 3 基（第 4 号墳墓、第 5 号墳墓、第 9 号墳墓）にも 2~3 点の礫が配置されています。



天内山遺跡第 10 号墳墓検出状況

第4号墳墓は大きさ1.2m×0.9m、深さ70cmを測る楕円形をしており、遺体が埋葬されていたと思われる両脇にはハの字状に長さ15～20cmの礫(円礫)が2点配置されています。遺物としては礫に挟まれるように刀子、鉄鏃が各1点出土しています。

第5号墳墓は大きさ1.25m×0.75m、深さ50cmを測る長楕円形をしており、遺体が埋葬されていたと思われる両脇には長さ10cmほどの礫が3点(円礫2、角礫1)配置されています。遺物としては礫に挟まれるように長軸に沿って刀子6点、礫の外側に鉄鏃7点が出土しています。点数は異なりますが、刀子と鉄鏃の組み合わせや礫の配置などは第4号墳墓と、お墓の形状は第10号墳墓と共通しています。

第9号墳墓は大きさ1.5m×1.3m、深さ60cmを測る楕円形をしており、遺体が埋葬されていたと思われる両脇にはハの字状に長さ15～20cmの礫(角礫?)が2点配置されています。遺物としては礫に挟まれるように刀子、袋柄鉄斧、礫の外側に鎌が各1点出土しています。刀子と袋柄鉄斧の組み合わせは第10号墳墓と共通しますが、鎌の出土に特徴が見られます。またお墓の形状や礫の配置は第4号墳墓と共通しています。

これら4基のお墓に共通しているのは、遺体が埋葬されていたと思われる周辺に複数の礫が遺体を挟むように配置されていることと鉄製品のみが副葬されていたことです。

擦文時代に属する残りの3基も見てみたいと思います。これらには礫の配置はありません。第1号墳墓は大きさ2.7m×1.3m、深さ50cmを測るいびつな長楕円形をしており、天内山遺跡では最大かつ最も多くの副葬品がみられたお墓です。副葬品として土器3点(深鉢1、注口土器1、注口土器?1)と鉄製品7点(刀子3、鎌1、鉄環2、不明鉄製品1)、鉛?製円環1点が出土しました。

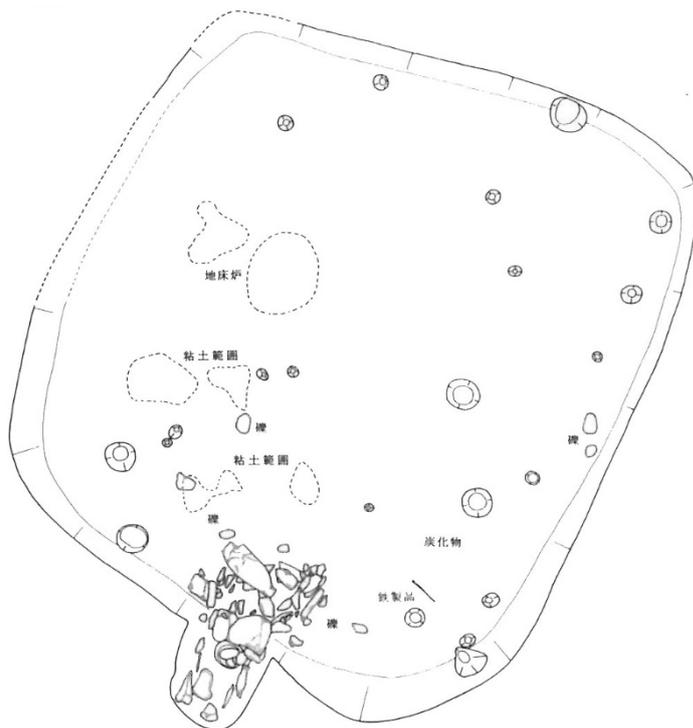
第3号墳墓は大きさ1.8m×1.1m、深さ34cmを測る隅丸長方形をしています。副葬品として土器1点(深鉢)と鉄製品1点(刀子)が出土しました。

第7号墳墓は大きさ2.1m×1.1m、深さ40cmを測る隅丸長方形をしています。副葬品として土器3点(深鉢2、鉢1)と鉄製品2点(刀子)が出土しました。お墓の形状や深鉢形土器と刀子の組み合わせは第3号墳墓と共通しています。

これら3基と前述の配石がみられたグループの4基と比較すると、鉄製品のほかに土器の副葬がみられます。また、お墓の形状は、第4号、第9号が楕円形、第1号、第3号、第5号、第7号、第10号は長楕円形あるいは隅丸長方形をしています。前者2基は続縄文時代後北式期の土器が副葬された第2号、第6号、第8号墳墓からの系譜であるお墓の形状を受け継いでおり、恐らく遺体は足を曲げた状態で埋葬された屈葬であり、後者5基はお墓の形状から体を伸ばした状態で埋葬された伸展葬であったと思われます。お墓の形状から考えると楕円形の方が古く、長楕円形や隅丸長方形のものが新しいと思われますが、配石の有無や副葬品の組み合わせ、これらの差異が埋葬された人物の性別やムラのなかでの身分、あるいは墓が造られた時期の差によるものなのか、様々な要因が考えられます。

3) 大川遺跡

余市川河口周辺にあるもうひとつの擦文遺跡が大川遺跡です。町内では唯一、擦文時代の住居址と墓がともに確認された遺跡であり、標高 2~5m ほどの砂丘上に位置します。73 基もの擦文住居が確認され、平面形は概ね隅丸方形を呈し、カマドが確認されたものは概ね共通して河口とは逆方向の南側に設けられ、大きさは 2m~7m ほどです。お墓は擦文時代に属する可能性があるものも含めても約 40 基を数える y 程度で、住居址の数からすると少ないと言えます。ただし、天内山遺跡とはその立地条件のちがいから、遺体の痕跡が確認され、埋葬方法がわかるものが多くみられます。

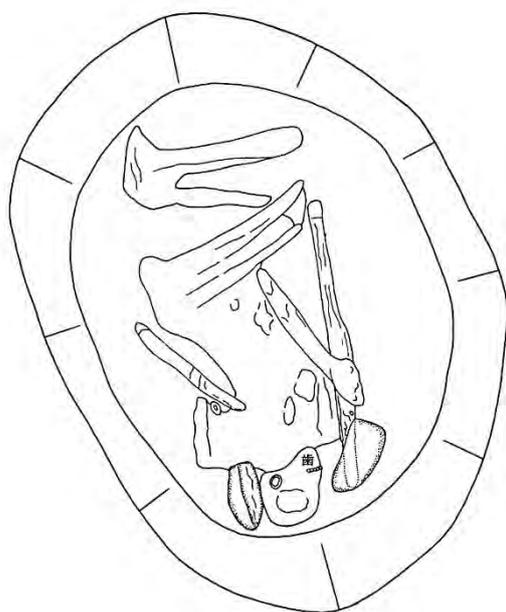


大川遺跡SH-34 検出状況

GP - 41 は大きさ 1.7m×1.3m、深さ約 60 cmを測る楕円形をしており、遺物としては大
刀 1 点、短刀 2 点、環状金属製品 2 点が出土しています。遺体は頭部を東側にして横向き
に膝を折り曲げて埋葬され、頭部の両脇には大きさ 20 cmほどの礫が配置されています。お
墓の形状は異なりますが、お墓の大きさ、副葬品、そして遺体周辺に配置された礫など、
天内山遺跡の第 10 号墳墓と共通点が多数みられます。



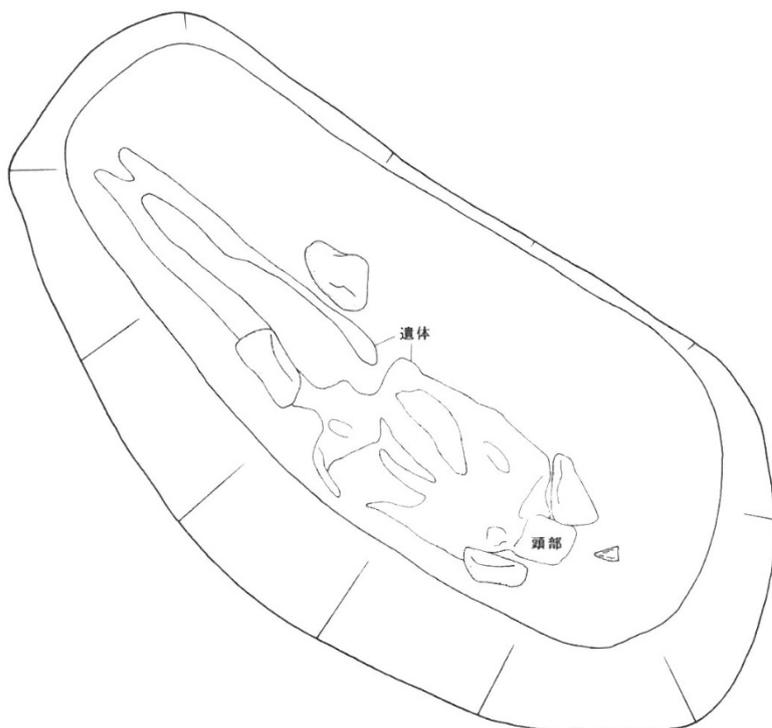
大川遺跡 GP - 41 検出状況



対して GP - 122 は頭部と大腿部の両脇に大きさ 20 cm ほどの礫が計 4 点配置されていますが、大きさ 2.2m×1.1m、深さ約 45 cm を測る長楕円形をしており、遺体は頭部を東側にして体を伸ばした状態の伸展葬でした。遺物は石槍 1 点が出土していますが、お墓に副葬されたものかは判然としません。GP - 41 とは配石は共通しますが、お墓の形状、埋葬方法からすると GP - 41 がやや古いと考えられます。また、GP - 92 はお墓の形状が楕円形で 4 点の配石が確認され、GP - 41・122 の両方の要素を持っています。



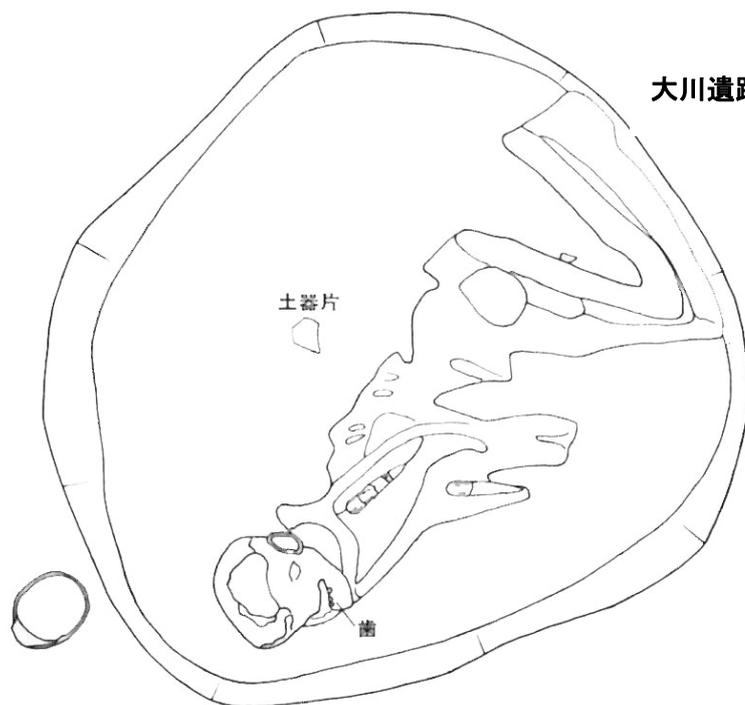
大川遺跡 GP - 122 検出状況



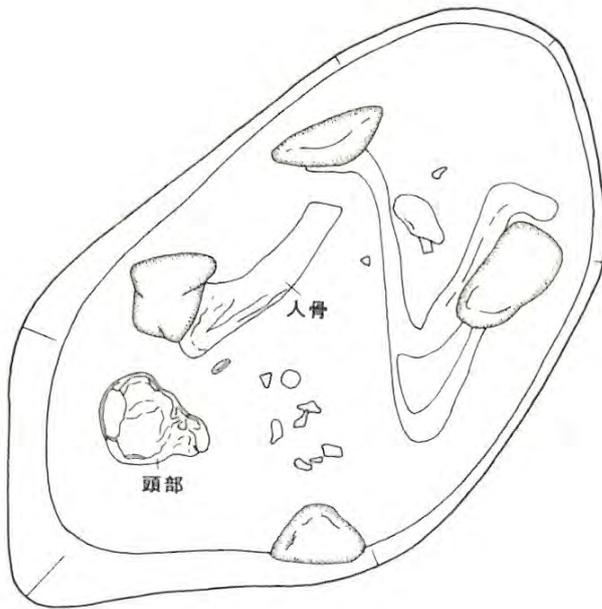
また、GP - 30 は大きさ 1.3m×1.1m、深さ約 23 cmを測るほぼ円形をしており、遺体は頭部を南側にして横向きに膝を折り曲げて埋葬され、遺物は環状金属製品 2 点、刀子 2 点が出土、お墓の外（頭部側）には土器が供えられていました。配石はみられませんが、GP - 41 とは、お墓の形状や埋葬方法、土器以外の副葬品の組み合わせは共通点がみられます。



大川遺跡 GP - 30 検出状況



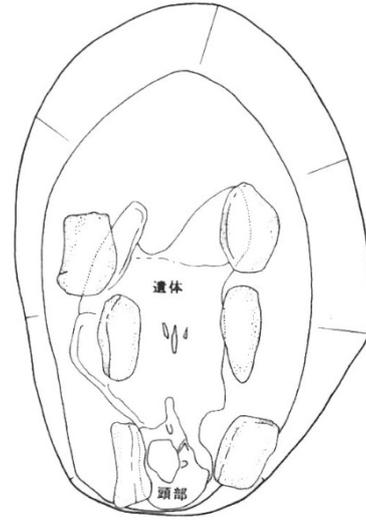
GP - 99 や GP - 137 などにもお墓の外（頭部側）に土器が供えられ、GP - 30 も含めいずれも口縁部を欠いて正立した状態で出土しました。GP - 99・137 とともに大きさ 1.3m×0.9m ほどの楕円形で、遺体は頭部を概ね南側にして屈葬で埋葬されています。GP - 99 にはみられませんが、GP - 137 には頭部から大腿部辺りにかけて遺体の両脇に 3 点ずつ計 6 点の礫が配置され、胸部上に 2 点の刀子が副葬されています。土器の出土状況などは GP - 30 と共通し、配石については数に差はありますが、GP - 41 や GP - 122 との共通点がみられます



大川遺跡GP - 92 検出状況

これまでみてきた天内山遺跡および大川遺跡での擦文時代のお墓を構成する要素と時代の流れを整理したいと思います。

続縄文時代から受け継ぐ円形あるいは楕円形のお墓に屈葬の遺体と土器の副葬 ⇒ 円形あるいは楕円形のお墓に屈葬の遺体と土器や金属製品の副葬（配石伴う場合あり） ⇒ 長楕円形あるいは隅丸方形のお墓に伸展葬の遺体に金属製品の副葬（配石伴う場合あり） ⇒ アイヌ民族の長楕円形あるいは隅丸方形に伸展葬の遺体と金属製品の副葬へとつながるといった流れが概観できるかと考えています。



大川遺跡 GP-137 検出状況

お墓における埋葬方法には、各時代によって広範囲にわたって共通する部分がある一方、その地域独特の風習がみられる場合もあり、その時代や地域の生死観や精神性が現れています。大川遺跡は縄文時代晩期から近世に至るまでの複合遺跡なので、時代によって墓自体の形状や副葬品の在り方に大きな変化がみられ、また他地域との共通性があるものもあれば、他ではみられないような検出事例もあることから、時代性や地域性を考えるうえで貴重な存在と言えます。また、天内山遺跡とは余市川を挟みますが位置としては近く、共通性のあるお墓がみられます。八幡山遺跡や沢町遺跡では擦文時代に属すると思われる墓は確認されませんでした。現代の生活と同様に日々の暮らしの場である住居域と死者の世界である墓域は区別され、そう離れてはいなくとも別々に設けられていたと考えられます。

<参考文献>

- 1971 「天内山―続縄文・擦文・アイヌ文化の遺跡―」 余市町教育委員会
- 1979 千歳市文化財調査報告書(4)「ウサクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査」
千歳市教育委員会
- 1982 江別市文化財調査報告書 15「萩ヶ岡遺跡」 江別市教育委員会
- 1989 「沢町遺跡」 余市町教育委員会
- 2000 「大川遺跡における考古学的調査Ⅰ」 余市町教育委員会
- 2000 「大川遺跡における考古学的調査Ⅱ」 余市町教育委員会
- 2001 「大川遺跡における考古学的調査Ⅳ」 余市町教育委員会